

氷点

映画文学人生論

原作：三浦綾子 (1964-65年) 「朝日新聞」
監督：山本薩夫(1966年) 脚本：水木洋子
出演：辻口啓造 船越英二 撮影：中川芳久
辻口夏枝 若尾文子 音楽：池野成
辻口徹： 山本圭 村井靖夫：成田三樹夫
辻口陽子 安田道代 北原邦雄：津川雅彦

汝の敵を愛せよ

「汝の敵を愛せよ」は新約聖書（「マタイによる福音書」 「ルカによる福音書」）の教えである。

人類の誰もがその通りにすれば、世界は平和になり、裁判官は失業すると思うが、裁判官やその家族にとつては幸か不幸か、今のところは。そうはなっていない。そして、多くの人は裁判官でなくとも、汝の敵を裁くことに熱中している。

この重いテーマを一般読者にも理解できるように、わかりやすく描いた作品が三浦綾子『氷点』だ。山本薩夫監督により映画化された。

北海道旭川市で病院を経営する辻口啓造（船越英二）は人格者として尊敬され、美しい妻（若尾文子）と二人の子どもに恵まれていた。この幸せそうな家族が突然、悲劇に見舞われる。

可愛い盛りの三歳のルリ子が浮浪者に殺されてしまったのである。その時、妻の夏枝は、眼科医の村井の来訪を受け、遊んでいってらっしゃいとルリ子を外に出していた。

病院長は二人の關係に疑惑を抱き、娘を殺したのは妻と村井だと直観した。やがて犯人が逮捕されたので、直接の加害者でないことはあきらかだが、それにしても、間接的には責任がある。口に出して批判するようなことはしないが、内心では犯人と妻と村井の三人の敵を憎んだ。

一方では、人格者だけあって、「汝の敵を愛せよ」という気持もある。愛と憎しみの心理的葛藤



氷点——映画文学人生論

から病院長は奇妙な行動にはしつた。犯人の子どもが乳児院にあずけられていることを知って、その子を養女にし、妻に育てさせることにしたのである。偽善者がやりそうな博愛的な行動にみせかけた復讐だ。

復讐は成功したかにみえた。妻は殺人犯の娘とは知らずに、可愛がって育てたが、ある日、夫の手紙を読んで、事実を知ってしまう。妻の心は凍え、娘を憎むようになる。兄(山本圭)は妹につらくあたるようになった母の態度に不審を抱くが、義理の妹に対する母の憎しみはつのるばかりだ。

そして、ついに高校生の娘(安田道代)に好意を抱く北原邦雄(津川雅彦)の前で、この子には殺人犯の血が伝わっていると告げてしまう。娘の心は凍えて氷点に達し、自殺をはかった。

夫が妻を裁き、妻が娘を裁いた結果がこれだ。一命を取りとめた陽子に兄と北原は同情し、結婚を望むが、陽子はその気になれない。彼女は誰も裁かないが、自分の罪をみとめ、自分を裁いた。

乳児院の医師の告白で、陽子の実父は殺人犯とは別の人物だとわかったが、彼女の罪の意識はかわらない。親が誰であろうと、人間は罪の子だ——自分は殺人をしていなくても、殺人を犯した先祖の誰かの血は伝わっている。氷点で凍える体験により陽子は人間の原罪というものを知った。

いくたびも罪の深さをたずねけり